

教育実習を終えて

文学部 日本語日本文学科

4回生 池 永 弓 佳

私は母校の高校で3週間の教育実習をさせていただきました。今年も新型コロナウイルスが流行している中での教育実習となりましたが、指導教員の先生をはじめ、先生方や生徒たちにも助けをもらいながら、3週間の実習を無事に終えることができました。今回は教育実習を通して感じた2つのことを述べたいと思います。

1つ目はICT機器を活用した授業が多くなっているということです。私が高校生だった時とは違い、全教室にプロジェクターが設置されており、授業用のタブレットを使って画像をプロジェクターに映すこともできるようになっていました。国語の授業だけでなく、様々な教科の授業を見学させていただきましたが、ICT機器を活用した授業を行っていらっしゃる先生方が多く、授業の中で効果的にICT機器を活用する方法を学ぶことができました。しかし、自分が授業をさせていただいた時には、途中で動かなくなってしまうのではないかという不安もあり、画像を映すだけで、あまり活用できなかったのも、動かなくなってしまった場合の対応を考え、ICT機器の使い方をきちんと学んだ上で、もう少し授業に活用すれば良かったと後悔しています。

2つ目は自分の知識や配慮が十分でないということです。授業をさせていただいた時に赤いチョークで字を書いてしまったことがありました。授業が終わった後に、授業を見ていただいた先生に赤いチョークで字を書くのは色覚障害のある生徒にとって見えにくいから、最近の教育現場では赤いチョークは使わないようにしているという風に教えてもらったことで初めてそのことを知ったので、教育現場や障害のある生徒に対する知識や配慮が十分でないと感じ、これからもっと勉強していく必要があると思いました。さらに、教材研究や授業の見学をさせていただいたことを通して国語についての知識も勉強不足だと感じることも多くありました。教育実習を行う中で、「教師は様々なことを学び続けなければならない」と仰っていただいたことが印象に残っていて、自分も日常生活の中で様々なことに興味や関心を持つよう意識して自分から学び、成長していかないといけないと強く感じました。

3週間の教育実習を通して、辛いことや大変なこともありましたが、実際に先生方や生徒たちと関わることができ初めて分かったことや学んだことも多くあり、教師になりたいという想いが強くなりました。しかし、後悔していることや反省点も多くあるので、それらを生かしつつ、これからも学び続けて幅広い知識を身につけ、理想とする教師に近づけるよう努力していきたいと感じました。3週間の実習を温かく見守り、指導してくださった先生方や、授業を真剣に聞いてくれた生徒たちに改めて感謝の気持ちを述べるとともに、成長した姿を見せられるよう励んでいきたいです。

教育実習を終えて

文学部 英語英米文学科
4回生 筒井 このみ

教育実習での3週間は振り返ると私にとって充実したものでした。この3週間は、実際の教育現場で学ぶ貴重な機会であり、自分自身の課題も多くありました。

私は、実習1日目に初めて教室に入った時、1人の生徒に質問をされ、その内容は自分の担当科目ではない理科の元素記号で、答えることができませんでした。初日から他教科の質問で答えられなかったのが悔しく、その日から、他の教科を予習したり、別教科の実習生に教えてもらったりすることで、生徒に聞かれても答えられるようにしました。また、生徒に話しかける話題もその話が出るごとに調べました。その結果、質問をしてくれる生徒が増えました。指導教員の先生に、「生徒からすると先生はみんな同じで、生徒はなんでも聞きます。」と言われ、実習生でも先生であることは変わらず、実習生であっても、先生というプロなのだと感じました。

授業を見学する中で、学級での先生の仕事、担当教科の先生の仕事は指導の方法や内容が全く違うと感じました。学級担当の指導教諭の先生は、生徒思いでとても真面目な方でした。生徒の意見に対し、先生がしっかりとフィードバックすることの大切さと、考えや成長差のある思春期の生徒だから伝えることの重要性を学びました。私の反省点や良かった点を毎日指導してくださり、そして、相手の視点に立ち、生徒の生活の少しの変化でも観察できる視野の広さに感銘を受けました。担当教科の指導教諭の先生には生徒と一緒に作り、生徒と考える楽しい授業を見せていただきました。タブレット端末を使った英語のクイズ形式や英語の大喜利を生徒自身が活動したものを授業にされていました。どうすれば生徒は活動しやすいのか考え、授業の構成や教材研究、プリント作りに加え、日常的に生徒との信頼関係を築くことが大切であるということを知りました。

道徳の授業では、学級担当の指導教諭の先生から学んだ、生徒一人一人の個性を生かした活動と担当教科の指導教諭から学んだ生徒と考えて生徒と作る授業を組み合わせた結果、たくさんの先生から面白い授業だったと言って頂きました。生徒からも「面白かった」や「先生の授業楽しい」ということを言ってもらい、とてもうれしかったです。

教育実習ははじめての経験ばかりで、自分ができる全てを出し切った楽しくて難しい時間でした。改めて、先生という職業の責任の重さ、相手の視点に立ち物事を考える難しさ、楽しさ、嬉しさ、大変さを知ることができました。先生方や生徒、指導教諭に恵まれた3週間でした。この経験は、一生私の力になり続ける宝物です。

教育実習を終えて

文学部 国際教養学科

4回生 小 牧 愛 実

教育実習の三週間、私は中学生と関わりたくさんの刺激を受け、教育現場についてたくさん
のことを学びました。「教師」という憧れの存在を近くで感じ、自分が想像していたこと、異な
る点と向き合い、自分を見つめ直す貴重な体験になりました。

六月七日、初めて自己紹介をし、担当クラスの生徒と会った時、実習生という立場でどのよ
うに接したらよいのか迷っていた私に、ある一人の男の子が「Hello! I'm crazy.」と話しかけて
くれました。私が、英語科ということを知って、英語で話しかけてくれたことが嬉しくて、今
でも鮮明に覚えています。その子がきっかけとなって、私はクラスの子たちとどんどん話せる
ようになりました。自分が英語教師になりたかった一番の理由は、自分が世界と日本の架け橋
になって、どんな国の人とでも仲良くコミュニケーションを取れるような子供たちを育てたい
という理由でした。その理由を、初日に思い出させてくれたことにとっても感謝しています。

日が経つにつれ慣れていくと共に、授業を持たせてもらえるようになって、毎日忙しくなり
ました。授業のことや近づいてくる教採についても悩むようになりました。上手くできない自
分にむかついたり、焦ったり、余裕がない時も多々ありましたが、指導教諭の先生が何度も練
習に付き合ってくれたり、親身になって指導してくださいました。自分の仕事があるのに、実
習生の私を常に心がけてくださり、私も期待に応えたいと頑張ることができました。また、授
業で失敗して、上手くできずにチャイムが鳴ってしまったことも、黒板がぐちゃぐちゃになっ
てしまったこともありましたが、生徒が笑顔で「分かりやすく、楽しかった」といつてくれ
るだけでとてもやりがいを感じるすることができました。大学四年生と中学二年生、教育実習生と
生徒という関係でしたが、生徒から学べることは本当に多く、真っすぐで素直な生徒たちに何
度も何度も救われました。

この三週間、忙しさから自分は「教師」になれるのか、たくさん不安になって、悩んだけど、
最終日に生徒からもらった寄せ書きや手紙には、「必ず先生になってね」という言葉がたくさん
書かれていました。この言葉で、やっぱり「教師」になりたいと再確認できました。将来、教
師になったら、この三週間とは比べられないような、忙しさや辛いことがたくさん待っている
と思います。ですが、この教育実習で強く感じる事ができた思いをばねに、良い教師になれ
るように精一杯努力をしたいと思いました。教育実習で出会った生徒たちにとって、私はたっ
た三週間だけ来た、教育実習生だったかもしれませんが、私にとっては、将来の夢をたくさん
見せてくれた大切な存在です。しんどくて、悔しい思いをたくさんした三週間でしたが、これ
から先、どんな人生になっても、忘れることがないような貴重な経験になりました。将来必ず、
良い教師になって生徒たちとたくさん成長していきたいです。

教育実習を終えて

文学部 史学科

4回生 濱 岡 あゆ美

私は5月26日から6月8日までの2週間、母校の公立高校で教育実習をさせていただきました。小学校から高校卒業に至るまで教育実習生の先生と関わる機会が多かったので、自分はどうな風に生徒から見られるかという大きな不安を抱えながら教育実習は始まりました。

感染症拡大防止のため、体育館で全校生徒の皆さんに挨拶することはできませんでした。なので、いきなりクラスの朝礼の時間に紹介された時の雰囲気や未だに忘れたことはありません。生徒は普段とは違う朝礼にフワフワしており、私も何を言うべきかソワソワしていました。私はこの時に「過去に接してきた教育実習生の先生も最初はこんな感じで挨拶したのかな」と考えていました。1年生のクラスだったため、始まったばかりの高校生活になじむことに一生懸命な姿が印象的でした。私の実習期間にテスト返しがあったため、様子を見ることができたのですが、点数はもちろんですが自分がミスしてしまったところを克服しようとクラスメイトや教科担当の先生に熱心に質問をしている姿に心を打たれました。ここまで熱心な生徒を見たのは初めてだったので私もそんな授業ができるように頑張ろうと思うことができました。

教科担当は3年生のクラスをもちました。日本史Bを担当しました。初めての授業では、それはもう授業とは言えないひどい結果でした。担当の先生からもアドバイスをいただきましたが特に大事なものは、とにかく調べる事でした。教科書や資料集だけではなくテレビや教育雑誌にも目を通すことも大事だと学びました。そしてそれを全部話さなくていい、むしろ話さきれないくらい調べることを目標にしようと考えました。毎回この作業を繰り返すのは容易なことではありませんでしたが良い経験になったと思いました。

大学受験を控えた生徒も多かったため、初めに私が通っている大学について少しだけお話をしました。すると、一人の生徒が授業後に「実は私も教師になりたいと神戸女子大学を目指しているから詳しい話が聞きたい」と申し出がありました。私はとても驚きましたが目を輝かせて質問を投げかけてくる生徒を見て「私もより真剣に答えないと」と向き合うことができました。実習中に関わった生徒の方は限られた人数でしたがとても濃密なやりとりを経験させていただいたのだと感じています。

この教育実習を通して、私は様々な経験をしました。それは受け入れてくださった母校の先生方や生徒の皆様、全面的にバックアップをいただいた大学の職員の皆様のご協力があったからこそ私は実習ができたのだと改めて実感しております。この感謝の気持ちと経験を大切にしながら将来への道を進んでいこうと思いました。

教育実習を終えて

文学部 教育学科

3回生 大 月 るみな

私は教育実習が始まるまでは実習先の児童や先生方と良い関係を築くことができるのか、児童の前で授業が出来るのかとても不安でした。ですが実習に行くと児童と関わる時間が楽しく、先生方も沢山挑戦の機会を下さり経験に即したアドバイスも頂き、四週間とは思えないほど濃く思い出に残る実習になりました。そして、中でも特に印象に残った出来事が2つありました。

1つ目は私が担当クラスの児童たちと関わった時のことです。私は教育実習に行く前に、実習では一日の中で話しかけていない児童を作らないようにするという目標を立てていました。そして実習中は朝担当クラスの教室に行った時に子供達1人1人に話しかけに行っていたのですが、その中で話しかけても反応がない児童や、距離の取り方が分からない児童がいました。私は毎日声を掛ける中で、声を掛けることがその子にとって良い対応なのか、このまま続けても良いのか迷いながら実習を過ごしました。ですが実習最終日にその児童達が手紙や紙で作ったお花や手紙を渡してくれ、今までやっていたことが相手にもいくらか伝わっていたことを知りました。私の対応がその児童にとって合っていたかを判断することはできませんが、私個人としては相手の反応が返ってきたことがとても嬉しくて、結果が目に見えなくても諦めずに続けることや挑戦することの大切さを知る瞬間になりました。

2つ目は児童の前で研究授業を考えていた時のことです。私は実習の2週目から児童の前で授業をしていたのですが、児童が内容を理解する前に活動を進めてしまう時が多々ありました。そんな中で研究授業を考えている時に学年団の先生方が授業を見て下さり、アドバイスを下さいました。その際に「児童の発達段階を意識した活動を行うこと。」「授業を通して児童に何を学ばせたいかを考えてから内容を組み立て、その目的に合った活動をし、授業を流すことを主目的にしないこと。」が大事であると教えて頂き、そこで自分の授業は自分の計画を優先してクラスのことを考えられていないことに気づきました。そこからは子どもたちの実態や学ばせたいことに合わせた授業作りを意識することが出来、実習の中で深く印象に残る出来事になりました。

また、私は教育実習に行く前と終えた後で心境に変化がありました。教育実習に行くまでは教師という仕事はどのようなものか経験していなかったこともあり、教師という道を選ぶかどうかをずっと迷っていました。しかし実習中に子ども達と関わる中で、子ども達の今まで出来なかったことが出来る様になる瞬間や、困難があっても工夫して乗り越えようとしている様子を間近で見ることが出来るのは教師ならではの感じ、教師への道がとても魅力的に映りました。そして実習での経験を踏まえ、私は教師を目指すことに決めました。勉強は大変ですが、自分の夢を叶える為に、子ども達の「出来た！」に関わる為にこれから頑張っていきます。

教育実習を終えて

文学部 教育学科

3回生 鈴木 咲智江

「絶対に地元で教師になって、またここへ帰ってきたい。」私は、教育実習を終えてこの思いが強くなりました。母校での4週間の教育実習は、温かい先生方と明るく元気な児童に恵まれ、非常に充実したものとなりました。この素敵な環境で様々な経験をさせていただき、多くのことを学びました。その中でも私にとって大きな学びが2つあります。

1つ目は、児童とのコミュニケーションの大切さです。私が教育実習を行った学級は、初日から非常に温かい雰囲気がありました。担任の先生は、常に笑顔で柔らかな雰囲気です。授業中も休憩時間も児童とコミュニケーションをとっていらっしゃいました。先生と話しているときの児童の表情は明るく、とても楽しそうな様子でした。児童との信頼関係を築く上でコミュニケーションは非常に大切なことだと実感しました。また、コミュニケーションをとる時の先生の雰囲気が学級に与える影響は大きいと感じました。そこで、私も、積極的に児童と関わり、コミュニケーションをとることを意識して4週間で過ごしました。すると、授業の中だけでは見えない児童の様々な面を知ることができました。そして、児童からも様々なことを話してくれるようになりました。さらに、私が授業をするときの児童の反応が良くなりました。この経験から、児童とのコミュニケーションは児童理解だけでなく、学びの多い授業づくりや学級経営にも大切だと学びました。

2つ目は、児童のために学び続けることの大切さです。実習中には、研究授業や授業研修会、指導案検討会などにも参加させていただきました。そこで、先生方がディスカッションを重ねながら、学校全体でより良い授業を作り上げていらっしゃることを知ることができました。その時、ベテランの先生が、「今でも沢山学ぶことがある。何年続けていても悩みは絶えない。教師になると普段は授業を行うため、他の先生の授業を見て学ぶ機会が少ないが、だからこそ校内研修会などの機会を大切にしている。」とおっしゃっていました。私は、その言葉が印象に残りました。何年経験を積んでも児童のために学び続ける姿から、私も学び続ける教師になりたいと決意しました。

4週間という短い間でしたが、様々な行事や会議にも参加させていただき、学校全体を実感することで、楽しく学びの多い充実した時間を過ごすことができました。実習中は、母校の児童の元気な姿や一生懸命に学習に取り組む姿が原動力となり、授業準備などを頑張ることができました。このような児童の成長を近くでサポートできる教師という職業は、とても魅力あるものだと実感しました。そして、教育実習を通して、教師になりたいという思いが強くなりました。お忙しい中、丁寧に指導して下さった先生や笑顔で迎え入れてくれた児童への感謝を忘れず、教育実習での学びを活かし、小学校の教師になるために努力していきたいです。

教育実習を終えて

文学部 教育学科

3回生 菱垣 美玖

私は母校である兵庫県の小学校で教育実習を4週間させていただきました。実習前は自分に教師が向いているのか、または務まるのかという不安がありました。

その実習で、私が一番印象に残ったことは校長先生からのお言葉です。担当させていただいたのは第4学年の1学級で、授業は全学級でさせていただきました。心配性で予想しない出来事が起きることが苦手だったため、授業の準備をすることを大切にしていたので、授業の展開をよく関わっている学級の児童で想像して考えていました。ところが、違う学級で授業をさせていただいた際に、想像していたことと児童の発表する内容が異なっていたり、学級ごとに盛り上がる場所が違ったりなど、それぞれの学級や児童の様子で授業の雰囲気が変わってくることに気づくことができ、自分自身の対応力のなさを実感しました。このような悩みに対し、授業後の指導で校長先生がおっしゃった「授業は生き物だ」という言葉がすごく心に残りました。授業で計画を立てて準備をすることも大切ですが、指導案はあくまで案であり、その時々に応じて臨機応変に対応していくことが最も重要であるということをお話してくださり、今後の課題としてその場の児童に合った授業を展開することができる対応力を持った教師になりたいと思いました。そして、それを意識した授業づくりの中で「先生の授業だ、やったー！」という声や、授業後に児童から「面白かったよ」「もっと受けて」という声を直接聞くことができ、私はこの言葉がすごく嬉しくて、もっと頑張ろうというやる気に繋がりました。また、音楽会の練習で、最初は楽器を使いこなせず、全体練習も上手いかなかった児童も見られました。しかし、練習をしていくにつれ日々成長し、普段は元気に楽しく生活をしている児童が、音楽会では全員で団結してかっこよく演奏をする姿に感動し、私が4週間で感じたこの気持ちを身近に感じることができる教師はすごくいいものだと感じました。

また、担当させていただいた学級の先生と児童についてお話しした際に、一人一人の頑張っていることや苦手なことを把握することが、教師の一つ一つの言動に繋がり、そこから児童の成長に深く関わっていることを実感しました。

児童の成長がやりがいに繋がることに気付くことができ、強く教員への憧れを持つことができました。この気持ちを持つことができたのは、教育実習で出会った小学校の先生方、児童、実習生のおかげであり、感謝の気持ちと、自分に自信を持つことができ、不安よりも強く持つことができた「先生になりたい」という気持ちを忘れず、今後、教採に向けて頑張りたいと思います。そして、子供たちとした「絶対先生になる」という約束を守り、一人一人に寄り添い、児童が成長できる学級づくり、受けてと思う授業づくりができるという理想の教師を目指したいと思います。

教育実習を終えて

文学部 教育学科

3回生 橘 実 玖

10月4日から10月29日までの4週間、私はとても充実した、一生忘れることのできない時間を過ごすことが出来ました。それには、忙しい中私たち教育実習生を温かく受け入れてくださった実習校の先生方や児童のおかげであると心から感謝しています。

教育実習を通して特に印象に残ったことは、音楽会の練習、そして自信を持つということです。

音楽会の練習では、今までは学校行事に取り組む側でしたが、運営する側になる体験ができました。ほぼ音楽初心者だったため、譜読みやハーモニー、テンポなど、教えることがたくさんで大変でした。色々ある楽器の中でも鍵盤ハーモニカの指導の補助に入りましたが、今どこを練習しているのか分からない、すぐに集中が切れてしまう児童が多く、授業とは違う難しさを感じました。しかし練習を重ねるごとに弾ける部分が増えた、ここを続けて弾けたなどの児童のできたときの表情や日々上達していく姿を見て、すごく嬉しく、そして誇らしく思いました。教育実習が終わった後、音楽会を鑑賞させて頂きましたが、演奏を聴いたとき、児童や先生方のこれまでの努力や苦勞、そして音楽が楽しいという想いが伝わり、とても感動しました。

「自信を持て。」研究授業の準備中に担当の先生から言われた言葉です。これまで授業実習を行わせて頂きましたが、自分が考えた授業で本当に児童が学ぶことができるのかなど、常に不安が頭から離れませんでした。その上、度重なる授業実習の失敗で、自信を喪失してしまっていました。研究授業も、この指導案で本当に大丈夫なのか、また失敗したらどうしようと思っていました。そんな私の姿を見て、担当の先生が「自信を持て。」と強く仰って下さいました。明るい声で堂々とした姿で授業に臨めば、絶対に上手くいく、その言葉を聞いたとき、私が自信のない姿勢で授業をすれば、児童も不安を感じたり落ち着きを無くしてしまうと気づきました。前日も学年の先生方が遅くまで残って模擬授業を見て下さったり、指導案や教具を何度も指導して下さいたため、絶対に成功するぞ、という強い気持ちで臨みました。前日の夜も数えきれないくらい練習したためか、当日はあまり緊張せずに堂々とした姿で行うことが出来ました。先生方からも、これまでで一番良かったと言って下さり、実習最後の日まで自信を持って授業を行うことが出来ました。

毎回の授業実習を先生方に見て頂き、指導や助言を頂く機会など、これから先無いと思ったため、学びの全てを吸収するつもりで教育実習を挑みました。4週間という短い期間で学んだたくさんのことは、全て私の宝物となりました。この宝物とともに、教員という夢に向かって努力する心意気です。

幼稚園教育実習を終えて

文学部 教育学科

4回生 多和田 真 南

私は母園である幼稚園で、4週間の教育実習をさせていただきました。周りの人がさまざまな園や施設に実習に行く中、コロナ禍で介護等体験実習も無くなり、自分一人だけが取り残されている、そんな気持ちで過ごしていました。そして何もわからない中、4回生にして初めての实習に向けての準備が始まり、遅れをとっている焦りと不安でいっぱいでした。しかし、この4週間で私の気持ちに大きな変化がありました。

実習中、色々なクラスの子どもたちが「先生」と何度も声をかけてくれました。それと同時に子どもたちにとって私は学生ではなく、ただ一人の先生として存在しているのだと実感し、実習に対する姿勢が少しずつ変わっていきました。実際に保育に入ってみると、自分の気持ちと向き合う時間は無く、子どもたちのことばかり考えるようになりました。実習を通して、保育する中で正解はないということをしごく感じました。私は4週間で2～5歳児のクラスに入らせていただくことができたので、より多くの経験をすることができました。月齢によって保育室の環境や子どもたちへの援助の加減が全く違っているということや、子ども一人ひとりに関わり方があり、先生一人ひとりの保育への考え方があり、教科書通りの保育は何一つないのだということを改めて感じる事ができました。それ以降、私の保育に対する考え方も劣っている部分はあっても間違っていることはないのだとポジティブに捉えることができるようになりました。もちろん毎日の日誌や指導案は思うように書くことができず、こんな自分が先生になれるのかと能力の低さを思い知らされる事が多くありました。また、担任の先生とクラスの子どもたちの信頼関係は何よりも強く、私が担任になった時に同じように子どもたちと向き合うことができるのかと不安にもなりました。しかし、毎日家に帰ってから思い出すのは子どもたちの顔や発言であって、決して嫌だったことや辛かったことではありませんでした。

今回の実習を振り返ると、初めは憂鬱で行きたくなかった実習もしごく実りのあるものになったと思います。喧嘩をしたり優しさが芽生えたり、できることが増えたり、日々成長を繰り返している子どもたちと過ごし、本当に充実した4週間でした。大変なことやしんどいことも多くあるのも現実ですが、それ以上に価値のある職業だと感じました。小さい頃から夢見た「先生」という職業、自分の年齢が上がるにつれ、保育への価値観も変化し、より素晴らしいものだと思う事ができています。実習中に貰った子どもたちからの手紙、恩師からの手紙は私が先生として進んでいくための糧となりました。背中を押してくれる人がいること、信頼してくれる人がいることを忘れず、4月から幼稚園教諭として日々成長していけるようたくさんの努力と経験を重ねていきたいと思います。

幼稚園教育実習を終えて

文学部 教育学科

4回生 蔦谷麻衣

私が教育実習で得たことの中で、一番大切だと思うことは保育教諭が「鳥の目、虫の目、魚の目をもって保育を行うことが大切である」ということです。全体を見る「鳥の目」一人一人を見る「虫の目」見通しをもって見る「魚の目」という意味があり、これは私が実習の中で指導して下さった先生から学びました。保育をしている中で常に全体を見て、子どもたちはどのように行動しているか危険なところはないか、環境構成は上手くいっているかなどを確認しています。それに加えて個々の様子の変化を早く感じられるように観察して、次の活動内容や、時間を決めて保育をしています。これらのように実習をしてもこの3つの目は大切だと感じる場面が多くあり、それを同時に行っている先生方は本当にすごいと尊敬しました。実習に行き目標としている部分は指導して下さる先生方のような姿ですが、最初は何をしたらいいかわからないことばかりでした。そこで私は先生方の動きを見ることと、子どもたちと同じ目線になること、この2つに絞って心掛けました。まず一番は子どもたちのことと保育の活動の流れを知ることが大切だと考えました。子どもたち目線になって活動することで必要な材料や必要な経験など今までになかった気づきがあることを学びました。また、保育の活動の流れを観察していて前もって計画された流れがあるけど、子どもたちの様子などを考えて臨機応変に変えて対応していることが多くあることに気づきました。そこから予想して環境構成をすること、計画を立てることの大切さや保育教諭が臨機応変に動けることが重要だと思いました。

実際に実習に行ってみて座学で勉強していた時とイメージが変わりました。なぜなら、座学で年齢別の発達具合や月齢ごとのイメージは学びましたが、実際に子どもたちと関わることで月齢ごとの中にも子ども一人一人で全然成長や発達が違い、性格も違うため同じ月齢でも子どもたちの様子は異なったからです。例えば「2歳だからイヤイヤ期だ」などといった決めつけはよくないと感じました。言葉かけでも同じことを感じ、私が実習中に難しいと感じたことの一つです。1クラスに20人ぐらいいる中で、同じ言葉かけをしても理解できる子とそうでない子にわかれます。十人十色という言葉があるように月齢が同じでも20人いれば言葉かけも20通りの方法で伝えるべきだと思いました。また使う言葉の選び方も難しいことの一つでした。自分では使った覚えのない適切でない言葉を使っていたりするので注意して選ばなければいけないと思いました。このように実習に行ってみないと分からないことが多くあり実習に行けたことで学ぶことができました。

教育実習を終えて多くのことを学び、経験させていただきました。子どもたちとの関わり方、保育の一日の流れ、行事の内容など様々なことを目の前で見ることで本当にいい経験となりました。この貴重な経験を私が就職し、保育教諭として子どもたちと関わる時に活かしたいと考えます。

教育実習を終えて

家政学部 家政学科

4回生 堀 井 彩 夏

3週間の教育実習は、長いようであつという間に過ぎていきました。特に、実習が始まってからの毎日は学校に着くとあつという間に1日が終わるほど、とても充実していました。

実習で1番に学んだことは、授業は「生きもの」だということです。この言葉は、高校の英語の先生の口癖でした。当時はあまり意味を分かっていませんでしたが、実習生として授業を行う立場に立つと、その言葉の意味を深く実感しました。

実習校はA～G組の7クラスあり、同じ単元の授業を7回させてもらいました。実習前から授業を組み立てており、大学の先生や実習校の先生方にもチェックをしてもらって完成させた指導案でした。しかし実際に授業を行うと、同じ授業であってもクラスの雰囲気や、時間割によって子どもたちの反応が全く違うことが分かりました。指導案という軸に沿いながら、子どもの様子に合わせてグループワークの時間を調節したり、当て方を工夫することの大切さと大変さを学びました。

実習中に気をつけたことは、子どもたちと初見の状態で行わないことです。実習校はおとなしい生徒が多く、授業中の発言がほとんどない校風であったので、少しでも生徒たちとの距離を縮めることが授業を盛り上げるポイントだと考えました。授業を行うまでの数日間に様々な教科の授業を見学させてもらい、その際にクラスの前で自己紹介をさせてもらいました。母校だったので、クラブのことや、食堂の好きなメニューなどを話し、親近感を持ってもらうことを意識しました。その結果、授業の準備を行っている子どもから話しかけてくれたり、授業中の発問にも積極的に答えてもらうことができました。

実習までに行った準備は、実習2週間前に実習先の家庭科の先生から授業範囲を教えてもらい、教材研究を行いました。その際に、教科書に載っている内容だけではなく、資料集や関連したテーマも調べることを意識しました。そして、指導案と板書計画、ワークシート、パワーポイントを作成しました。実習前に授業準備を行っていたおかげで実習中は家庭科の授業だけではなく、様々な教科の授業見学を行うことが出来ました。先生によって板書の方法、ワークシートの使い方、授業の進め方などの授業スタイルがあり、勉強になりました。

生徒との交流では、ショートホームルームやロングホームルーム、探求の時間、掃除の時間などに積極的に参加し、クラスに実習生の先生がいるのが当たり前と感じてもらうことを意識しました。放課後に運動会の準備のクラス旗の作成や、シンボルマークの作成にも参加し、3週間という短い期間でしたが、多くの時間を子どもたちと過ごすことができました。

3週間の実習は本当にあつという間で、終わってほしくないと思うほど毎日が充実していて楽しかったです。授業準備や実習ノートの記入は大変でしたが、それらを上回るほど、子どもと接したり、家庭科を教えることが好きなのだと改めて実感しました。「教員になりたい！」というこの気持ちと、大好きな母校での実習を忘れずに4月からの教員生活を頑張ります。

栄養教育実習を終えて

家政学部 管理栄養士養成課程

4回生 大西舞奈

小学校での1週間の実習は不安と緊張でいっぱいのスタートでしたが、先生方や子どもたちとの出会いに恵まれ、学びの多い充実した日々を経験し、実習最終日にはまだまだ教育現場で学びたいと思う気持ちが強く残りました。この教育実習を通して、将来、栄養教諭の道に進みたいという思いが確信に変わりました。実際に教育現場で活躍される先生方の姿を見たり、子どもたちと接していく中で教師としての在り方を学ぶことができました。1週間という短い実習期間で学級活動・授業・クラブ活動・給食施設などの見学、研究授業や給食時間指導の実習など多くの貴重な経験をさせていただき、これから身に付けていかなければならないと感じた課題を発見することができました。

実習では指導案の検討や研究授業に向けた準備に苦勞しました。授業づくりを行う上で、授業の主役は子どもたちであることを忘れてはいけなないと気付きました。実際に子どもたちの前で授業を行った際、教えるという意識を強くもちすぎたため、子どもが主体的な授業、子どもから引き出す授業が行えていなかったと指導していただきました。研究授業を通して、子どもたちとのやりとりを大切にし、時には待つて耳を傾けることが大切であると学びました。一方で、子どもたちに任せすぎると本来の趣旨とずれていってしまうということを教えていただきました。授業づくりでは、どのような問いを立て、どのような言葉かけをすればよいか考えていくことが必要であると気づき、繰り返し検討して改善していくことが重要であると学ぶことができました。

栄養教諭の先生から様々なことを学ばせていただき、役割について具体的にイメージすることができました。食育という科目がない中で、子どもたちに働きかける方法を考えながら積極的に実践されていた栄養教諭の先生の姿が印象に残りました。新型コロナウイルスの影響で給食が黙食となり教室で行う給食時間指導ができない代わりとして、ICTを活用してモニター越しに指導を行い、子どもたちと関わる機会を設けるなど新しい取り組みをされていました。栄養教諭自らの働きかけ次第で様々な取り組みを行うことができると感じ、考え続けて実践する力を身に付けることが大切だと学びました。また、日頃から先生方とコミュニケーションをとっておられ、子どもたちだけでなく先生方とも関わることを大切にされていました。栄養教諭は様々な場面で連携が欠かせないことから、信頼関係を築く行動を心がけておくことが大切であると学びました。

栄養教諭は学年問わず子どもたちと関わっていくことができる魅力のある職業だと改めて気づくことができました。この経験を通して感じたことや学んだことを忘れずに、将来に活かしていきたいと思います。

栄養教育実習を終えて

健康福祉学部 健康スポーツ栄養学科

4回生 大 宮 きらり

「栄養教諭は、いかに周囲の先生方を巻き込んで食育を進められるかが力量だよ。」と、実習最終日、指導教諭にかけていただいた言葉がとても印象に残っています。

私は9月6日から10日までの1週間、神戸市立の小学校で実習をさせていただきました。事前打ち合わせの際に実習校の様子を伺ったところ、「明るくのびのびと育った元気な児童ばかりですが、給食では今まで口にしない食べ物に対する苦手意識を持つ児童も多く、残食（主に和食）が多いことが課題」とのことでした。そこで、私は家庭や給食でも色々な食材に挑戦してほしいと考え、苦手な食材としてよく挙げられる魚に題材を決めました。魚を一匹自分で食べられるようになってほしかったので、教材に本物の魚を用いたかったのですが、現在のコロナ渦の環境を踏まえて紙媒体とパワーポイントを作成しました。児童が主体的に楽しく学べる授業を行うためにはどのようにすればよいか、指導案や教材について何度も指導教諭と話し合い改善していきました。

指導教諭のはからいで研究授業の対象だった3年1組の授業参観以外にも、朝のホームルームや給食時間によく入らせていただきました。事前に児童と関わったことで、同じ学年でも各クラスによって雰囲気は全然違うことを知ることができました。実際に教壇に立つと45分の授業の中で次々に伝えたいことが出てきてしまい、要点を絞って伝えることや、メリハリをつけた授業にすることが特に難しかったです。しかし、授業後に子ども達から「楽しかった！」や「魚食べてみようと思った！」などたくさん感想を伝えてもらったことで、私は子ども達がもっと色々なことに興味を持つきっかけを作れる存在になりたいと改めて思いました。また、初めて教員の立場として学校現場を経験し、教員として児童と接することがとっても新鮮で、教えることの楽しさと“個に応じた対応”をすることの大切さを痛感しました。

栄養教諭は各学校に一人ずつ配属されることが多く、学校給食の運営やアレルギー対応をしながら、各学年の食育指導を年間計画にそって実践していきます。そのため、全校生徒の様子を日頃から観察し、各学年に見合った題材を選択していく必要があります。しかし小・中学校はカリキュラムがすでに決まっているため、そこに食育指導のみの授業を組み込むことは難しいのだと教えていただきました。そこで重要になってくるのが、冒頭にもあった指導教員の言葉だと思えます。私も栄養教諭になった際には、ただ漠然に食育指導を行いたいと先生方に伝えるのではなく、「このクラスの授業とこの食育の題材を結び付けられないでしょうか？」など具体的かつ積極的に提案していきたいと思えます。

最後にこの実習を通して栄養教諭の魅力と責任を再確認することができました。5日間の実習を実りある時間にできるように様々な経験をさせてくださり、教員としてのあるべき姿を教えていただいた指導教諭を含め、実習校の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。これからも日々学び続けることを忘れずに、教育に携わっていきたいと思えます。

養護実習を終えて

看護学部 看護学科

4回生 山中 菜摘

小学校での養護教育実習を通して、児童理解に関することやチームで子ども達を支えていくことなど多くのことを学ばせて頂きました。

保健室には毎日多くの児童が来室しており、それぞれに悩みや課題を抱えている姿を目にしました。子ども達が抱えているものを把握するために、養護の先生は、保健室での児童との1対1の関わりの中からだけで判断するのではなく、児童のことをあらゆる側面から観察されていたことが印象的でした。例えば、登校時の表情や活気、クラスメイトとの関わりや休み時間の様子、授業中に担任の先生と関わっている様子など、児童の学校生活を様々な視点から観察されていました。児童の学校生活をよく観察することで、あらゆる可能性と見立てを持ち、児童1人ひとりが抱える課題を正確に捉えようとする姿勢が必要になると学びました。

そのほか、来室児童の対応では、子ども達との向き合い方に関する学びがありました。来室児童の対応を行うようになった頃は、体調不良を訴える児童に対して、この場合は休ませた方が良いのか、逆に休ませない方が良いのか、ということに頭がいっぱいで、本当の意味で、目の前にいる子ども達の訴えに耳を傾けるということが出来ていませんでした。体調不良の原因を早く把握しなければいけないと思い、話を聞き出すような問診になり、子供達に緊張感を与えてしまったのではないかと感じました。養護の先生の児童への対応を見学すると、何かを聞き出そうとするのではなく、継続的な日常会話を大切にされていました。またその際、児童の兄弟関係・家族背景や、これまでに児童が話してくれた内容等も覚えておられ、それらを会話の種とされていました。子ども達が、自然体で素直に感情を表出している姿を見て、子ども達の素を引き出すためには、子どもへの関心を高め、あなたのことを大切に想っているという想いを根底を持った上で、継続的な日々の会話が重要になるのだと学ぶことが出来ました。

また、先生方や関係機関の方とのコミュニケーションを大切にされている様子を見て、児童のことを丁寧に情報共有し、話し合いを重ねながら、児童にとっての最適な対応はどうすることかを、常にチームで考えていくことが大切であることも学びました。

3週間を通して、子ども達の話をお聴いていくと、背景に抱えているものが複雑で、解決しきることが難しい問題もあると実感しました。しかし、いかなる状況であっても、まずは、目の前にいる子ども達の話をよく聴くこと、様々な側面から子どもの様子を観察し、問題はこれだと決めつけることなく、あらゆる可能性を考えて課題の本質に近づこうとする姿勢を忘れないようにすることが重要になると実感しました。貴重な経験をさせて頂き、狭き門ではありますが、いつか養護教諭として子ども達の支えになりたいという気持ちが強くなりました。今後も自分自身成長できるよう、勉強に励むと共に、人間性も磨いていきたいと思えます。

教育実習を終えて

総合生活学科

2回生 梅 崎 華 鈴

総合生活学科の教育実習報告会で、それぞれが実習での様子や反省、課題を発表しました。教育実習へ行き、私たちは沢山のことを学んできたことが分かりました。また、自分では気づくことのできなかった成長や反省点が浮かび上がってきました。そして、実習校によって、生徒の人数、教員の人数、時間割、登下校時間、学校方針など異なっていたので、学校に応じた、生徒に応じた対応ができる柔軟な教員であることが大切だと思いました。

中学生は心、身体の成長が著しいということもあり、学年によってクラスの雰囲気は全く違うものでした。1年生は騒がしく、クラスみんなで物事を行うことをとても楽しんでいる様子が窺えました。それに比べて2年生はピリピリとした空気感になることも多く、クラスみんなという意識よりかは、数人のかたまり仲良い友達と居ることを好んでいるように見えました。生徒間での揉め事が多いのも印象的でした。3年生は1、2年にはない落ち着きがあり、3年間でクラスみんなとの絆や理解を深め合ったのだろうと感じる団結力や優しさが伝わってきました。しかし、2年生のようにピリピリとしている様子や、先生に強く反抗していたり、生徒間での揉め事もあったりとまだまだ思春期や反抗期である様子が窺えました。2、3年生には、起きたことについて、ただ叱る、怒る、注意するだけではなく、思春期や心が不安定であることを考慮した上での指導が必要だと感じました。生徒と向き合うというのは、見えたことだけの事情を淡々と聞いて解決するだけでなく、どう思っているのかなど見えない心情を読み取ることが本当の「向き合う」ことであり、決して簡単なことではないと思いました。また、実際に、指導している先生を見て勉強を教えることだけが先生の役目ではないと強く実感しました。もちろん、生徒の学力をあげることも大切ではあるけれど、生徒一人ひとりの人間性や心と身体の健康を守ることも大切な役目で、このような役目を果たすことで、生徒と先生の間には壁ができにくくなり、悩みを話してくれたり、プライベートなことにも関わりやすくなったりするのではないかと考えました。生徒支援や生徒指導は、先生に生徒が話してくれることを当たり前と思わず、生徒を尊重して耳を傾けることが重要だと感じました。

これらのことは大学の講義では学びきれず、実際に中学校に行き、リアルな姿を知ることで学ぶことができました。教育実習は教員になりたい私にとってかけがえのない経験であり、貴重な時間でした。私は、学ぶことを辞めず、日々生徒と共に成長できる教員になりたいと思います。

栄養教育実習を終えて

食物栄養学科

2年生 森 長 咲 奈

私は島根県にある母校の小学校で、1週間の栄養教育実習を行いました。実習に行く前は、自分に授業ができるのか、先生方と上手くコミュニケーションを取ることができるのかなど、不安なことが多かったです。しかし実習が始まると、子どもたちが積極的に声をかけてくれたり、先生方にはたくさんの指導を頂いたり、本当に充実した1週間を過ごすことができました。

私が栄養教育実習を終えて感じたことは2つあります。

1つ目は、食育の授業を行うにあたって事前準備がとても大切だということです。私は、3年生の児童に「バランスの良い朝ごはんを考えよう」というテーマで授業を行いました。自分が児童に伝えたいことは何なのか、どのような媒体を使えば児童の気を引くことができると楽しいと思ってくれるのか、どのような言葉を使えば児童が理解してくれるのかを考え、時間をかけて授業の準備をして臨みました。児童が媒体を見た時に「すごい」「これは何だろう」など興味を示してくれ、授業後に「先生の授業楽しかった」「もっと勉強したい」と言ってもらえた時は時間をかけて授業の準備をしたことが児童に伝わったと思いました。先生方からは、食べることは楽しいと思える授業だった、児童との接し方が良かったと評価を頂きました。

2つ目は、学校現場では連携がとても大切だということです。連携の大切さについては栄養教諭の先生から、食育の授業は栄養教諭1人では行う事ができず、担任の先生と児童の様子を共有しそこから授業内容を考えたり、給食の指導をしたりと担任の先生方と連携・協力することが大切だということを学びました。また、連携が最も大切だと思ったのはアレルギー対応です。私が実習に行かせて頂いた小学校には数人アレルギーを持つ児童がおり、実際にアレルギー対応の方法を見せていただきました。アレルギー対応が必要な日は、いつも以上に教員間で情報を共有し、入念にチェックを行っておられ、連携や情報共有の重要性を実感できました。また、給食におけるアレルギー対応においては、栄養教諭が先頭に立って進めていくことの必要性を感じ、栄養教諭の学校での位置づけも理解できました。

私はこの1週間の栄養教育実習を通して、実際に多くの子どもたちと関わり、また先生方にご指導を頂き、たくさんの気づきや学びがありました。実習は、1週間という短い期間でしたが、子どもたちと直接接して、授業をし、共に過ごすという体験をして、栄養教諭だからこそ伝えることができる食事の大切さや食べることの楽しさを、子どもたちに伝えていきたいという思いが一層強くなりました。実習で学んだことを活かしこれから栄養教諭・栄養士として多くの子どもたちに関わっていきたいと思います。

最後に、コロナ禍という大変な中、実習を受け入れて下さった母校の先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

幼稚園教育実習を終えて

幼児教育学科

2回生 北 藤 楓 香

私は6月に出身園である認定こども園で、3週間の幼稚園教育実習をさせていただきました。新型コロナウイルスの影響で、1年次の幼稚園実習オリエンテーションは遠隔となり、園への電話や訪問など、初めてのことばかりで不安でいっぱいでした。しかし、コロナ禍でも、快く幼稚園教育実習を引き受けてくださった認定こども園の保育者の方、実習訪問で指導してくださった先生方など、たくさんの方のお力添えをいただいたおかげで、無事に3週間の幼稚園教育実習を学び多きものにすることができ本当に感謝しています。

幼稚園教育実習を終えた今、3週間という短い期間ではありましたが、担当させていただいた4歳児、園の保育者の方々からたくさんの発見や経験、学びを得ることができたと感じています。その中でも、私がこの3週間の幼稚園教育実習で印象に残っている思い出や学びが2つあります。

まず1つ目は、子ども一人ひとりの個性を理解しかかわることの大切さです。同じ年齢の子どもたちでもできることや感じることはその子どもによってさまざまです。活発に行動する子どもいれば、こだわりが強くマイペースに行動する子もいる中、保育者の方はその一人ひとりの個性を理解しその子どもにあった援助をされていました。私自身もそのような援助の仕方を学び、3週間の中で子どもたちの個性を覚えながら援助をしたことで、子どもたちと相互的なかわりをすることができました。このようなかわりをする中で、子ども一人ひとりの良いところをさらに伸ばすことができたり、保育者との信頼関係を築いたりすることができるのだと学びました。

次に2つ目は、3週間ともにした4歳児の子どもたちとの思い出です。子どもたちは明るくパワフルで、この子どもたちとのかかわりが私にとって毎日の力の源でした。子どもはいろいろなことに興味を抱いていて、私がそこから発見を得ることも多々ありました。その中でも、草取りの時間に根強い草を抜こうと頑張っていた子どもが「先生、この草、下からだれかが引っ張ってるから抜けないんじゃない？」と伝えてくれたことが今でも忘れられません。子どもたちは想像力が豊かで、日々の保育の中でたくさんの学びを得ているのだと感じたとともに、子どもたちの世界はすごく広くて面白いなと感じました。その子どもの世界を保育者も一緒に広げてあげることや、そのために保育者自身がまず楽しむということが何よりも保育の中で大切なことなのだと感じました。

私はこれらの学びを得て、3週間という短い期間ではありましたが、子どもたちや保育者の方々とのかわり、部分実習や全日実習からの学びを通して、自分自身の大きな財産になったと感じています。また、保育者という職業は子どもたちの大切な時期に寄り添える素敵な職業であると改めて思いました。これまでの実習で学んだことをしっかりと自分のものにして、次は実習生としてではなく、4月から保育者として励んでいきたいと思えます。

学校観察実習を終えて

文学部 英語英米文学科
3回生 岩田 夏美

私は神戸市の中学校で約1年半、スクールサポーターとして活動させていただきました。教育実習前に今の学校現場の雰囲気慣れておきたい、授業方法や内容などを知りたいという目的でこの活動を始めました。活動前と始まった当初は緊張と不安で胸がいっぱいと思うように動けませんでした。しかし、「じっとしては勿体ない!」と思い、生徒や周りの先生とコミュニケーションを積極的に取ったことで、回数を重ねるごとに様々な発見や学びがありました。

学びや発見の1つ目は生徒との関わりを通して、生徒に寄り添ったコミュニケーションの重要性を実感したことです。初めはコミュニケーション方法に戸惑い、時々壁を感じるがありました。そこで、休み時間や空いている時間に何気ない会話（例えば、持ち物や天気など）から始め、たくさん生徒に話しかけにいきました。また授業中の机間指導では、生徒の様子を注意深く観察しながら、分からない語句や表現などがあった場合は一緒に1つ1つ確認しました。その結果、徐々に生徒が自分の趣味や好きなことを楽しそうに話をしてくれて、質問などをしてくれる頻度も増えました。生徒との関わりの中で丁寧に生徒と向き合う姿勢はとても大切なことであるということを強く実感し、また生徒の興味を掴み、知ることでそれが授業づくりや活動にも大きく影響していくということも学びました。

もう一つは先生方との関わりを通して、色々なことにおいて、生徒たちの主体性を大事にした授業・活動づくりが大切であるということを感じました。教科の授業やホームルームでの活動で机間指導に入る際に、作業が難航していたり、問題や話し合いにつまずいている生徒を見ることがありました。そこで先生方はただ「答えを教える」のではなくその「答えを導く」ための指導・支援をされていました。疑問点や苦手な部分を少しでも理解に繋げるための伝え方の工夫は難しいと思います。けれども何が苦手な点でどのような点に疑問があるのか、どこでつまずいているのかを理解する。答えは出なくとも、生徒が自ら考えて取り組める環境をつくり、共に取り組む姿勢が非常に大事だと思います。同時にその「考える過程」を支えていくことも大切な要素だと考えました。

最後に、この活動はこれから様々な人と出会い、関わる上で非常に深い学びができる活動です。活動を通して、難しいと思うこともあり、自分の対応力の不十分さに悔やむ時もありました。しかし、授業づくりや評価方法など教育に関することだけでなく、人に何かを伝える力や、自分自身の考え方を見直すきっかけにもなりました。ここで得たこと・学んだことを胸に刻み、今後の生活で生かし、新たな目標に向かって日々精進していきたいと思います。このような貴重な経験をさせていただいた配属先の中学校の生徒、先生方をはじめ、活動に関わる全ての方々に感謝の意を表したいです。本当にありがとうございました。

学生ボランティア活動に参加して

文学部 教育学科

3回生 曾我部 絢

学生ボランティアの活動は今年度で2年目になる。昨年は1年生の体育と3年生の図工の時間を担当することが多く比較的限定されていた。しかし、今年からは、1年生から4年生まで幅広く担当することができた。そのため、様々な子どもと接することができ、多くの学びがあった。教育実習に行った後の活動では、教育実習で学んだことを活かして、子どもと接するように心がけて活動に取り組んだ。学生ボランティア活動を通して、各学年の授業で補佐をすることや、指導教員からお話を聞くなかで印象に残ったことが二つある。

1つ目は、2年生の算数の時間で解き方がわからない子どもの補佐に入ったときである。その子は発表することも自分の意見を伝えることも苦手であるため、私はどこまでわかっているのか把握することに苦戦した。ここで学んだことは、子どもの目線に立って、わからなくても大丈夫だと共感し、やる気を折らないように声かけをすることが大切だということ学んだ。発達段階に即して、2年生の場合はできないといけないという危機感を持たせるのではなく、算数が嫌いにならないように諦めずに取り組む力を伸ばすことが大切だと思った。

2つ目は、授業外に指導教員とお話をしていた際に聞いたことである。先生のお話から、できない子、遅れている子は休み時間に時間をかけて、授業中はできる子を伸ばすことが大切だと学んだ。できる子が諦めてしまうような授業は、学級全体の学力を低下させてしまうことにつながるため、飽きない、諦めないようにするための工夫が大事である。例えば、授業でプリントを解くときに、A、B、Cと3パターンの難易度別のプリントを用意することや、6年生でできる子には中学生の問題を解かせるなど、子ども自身が問題を選択できる環境をつくることが大切だと学んだ。また、バイキング形式にして、プリントの上に食べ物の写真を置いて問題内容がわからないようにし、本当のバイキングを楽しむ感覚にさせる。ただプリントを解くだけでなく、ひと工夫付け加えるだけで、やりたい！と子どもに興味を持たせるような工夫が大切であると知った。私は、このような工夫を追究し続け、子どものやる気につながるような授業や話ができるように努力し続けようと思う。

学生ボランティアの活動では、子どもとコミュニケーションを取ることや、先生方のお話が聞くことができるため、とても貴重な経験ができた。これらの経験を通して、私は、子どもと共に学び続けることができる教師を目指し、みんなが明るく居心地の良い学級づくりを行いたいと思う。そしてそれと共に、今後の人生に活かしていきたいと思う。

学生ボランティア活動に参加して

文学部 教育学科

3回生 篠 島 菜津子

学生ボランティア活動に参加して、一年半が経ちました。週に一度の活動ではありますが、先生方の姿や子ども達の姿、学校の姿から多くのことを日々学んでいます。一日の中で起こる数々の出来事の中で、学生の身で、どこまで踏み込んでいいのか、何をして良くて何をしてはいけないのか、悩むことも多くありました。学校の中で悩んでいる子、どうしたらいいのかわからない子に対して、何かしてあげたいのに自分ではどうしてあげることもできないもどかしさも感じます。しかし、捉えようによってはプラスになることもあるのだと思います。先生方より児童との年齢が近いことから児童にとって相談しやすい存在になれたり、先生方の見えない範囲をサポートできたり、いろいろな先生方の良いところを吸収できたり等、学生の身だからこそ、学べる環境が沢山あることにも気づくことができました。学校にうまくなじめない子に対して、その子がなじめるようにはどうしたらいいかをずっと考えていましたが、自分の力では答えが出ず、もやもやした気持ちを抱いていた時もありました。しかし、なぜなじめないのかではなく、この子が何に興味があるのか、その子のことを知りたいという気持ちになってからは、すうっと気持ちが軽くなった気がします。このことから、子どもと同じ目線に立つことの大事さを学びました。なじめていることが当たり前という考えが私の中であったために、その子自身のことを考えられていなかったのだと思います。それは、スクールサポーターとして日々その子と向き合う時間があったからこそその学びでした。

また、一人の児童に対していろいろな先生方のアプローチがあり、どの子にとっても一番になれる先生がいなくても大丈夫なのだと思えるようになりました。もし自分の力ではうまくいかない時があっても、いろいろな先生に頼ることが出来る、いろいろな先生がいるからこそその学校なのだと思います。いい先生とは、だれからも好かれる先生ではなく、強い信念をもって真剣に児童と向き合っていくことができる先生なのだと思いました。また、先生にも得意不得意な部分があり、それを素直に伝えられる素直さも教師には必要なのだと思います。様々な先生の姿を見た中で、私は、謙虚さ、素直さ、前向きさを兼ねた教師を目指したいです。今、学生のうちにできることは、様々なことにチャレンジし、色んな失敗を経験しておくことだと思うため、スクールサポーターとしての活動をできる限り続けていきたいと思っています。

学生ボランティア活動に参加して

文学部 教育学科

3回生 幅田麻友

スクールサポーターとして学校現場に携わらせていただくようになってから、1年半程が経過しました。頻度は週一回のペースと、時間に換算すればそれほど多くは無いかもしれませんが、この期間を通して少しずつ教師の実態や学校現場の様子を掴むことができるようになっていくという実感があります。また、ボランティア開始時から継続して同じ学校にお世話になっていることもあり、先生や児童との信頼関係を築けるようになっていくことで、より前向きに、そして積極的に活動へ臨めるようになっていく自分自身の変化を感じられることが嬉しいです。

2年目ということもあり、活動に慣れてくるとともに、どんどん小学校の先生方からの要望も具体的で高度なものになっていきます。例えば今年度は、別室登校をしている児童へ、一時間分の授業を一人で施すという任務を与えていただいたり、出張されている先生の代わりにクラス監督として一人でクラスを一時間担当させていただいたりしました。その日何をするかはボランティアに行ったときに知らされるので、毎回本当にドキドキするのですが、先生方の助言やサポートに支えられ、何とかやり遂げることができています。一年目には絶対に考えられなかったような役割を任せてもらえるようになると、責任感も大きくなりますが、少しずつ自信もついてきます。毎回反省することは山のようにありますが、その気付きも経験によってはじめて得られるものなので、大きな収穫として前向きに考えるようにしています。

また、私には活動の際に常に心掛けていくことがあります。それは、「多くの児童と関わりを持つ」とし、「自ら行動すること」です。活動が2年目に入ったころ、校長先生から、「二年目で少しずつ分かってきたことも増えてくるでしょう。しかし現状に甘んじず、常にステップアップしていかないとはいけません。今年度は視野を広げて、これまであまり関わりが多くなかった子どもたちに目を向ける意識をもっていきましょうか。」と声をかけていただきました。確かに、振り返ってみると1年目の私は、寄ってきてくれる子どもたちとの関わりがメインで、それ以外の児童との関わりはやや希薄であり、児童によって関わり方に濃淡がありました。その点を反省し、上の目標を立てました。今年度は、たとえ話す内容を思いつかなくても、近くにいる児童には何かしら言葉を掛けるように意識するようになりました。そのかいあってか、学校ですれ違う子供たちは「先生、あのな」と自ら話しに来てくれることが増え、多くの児童と自然なコミュニケーションをとることができるようになりつつあります。

トライ&エラーという言葉がありますが、私のスクールサポーター経験を一言で表すならば、まさにそのような感じだと思います。たくさんの経験が私自身を成長させてくれることを強く実感するようになり、何でもしてみようと思えるようになった気持ちの変化は、大学生活や普段の生活にも生きています。この経験をこれから先も、私の糧として持ち続けていきたいです。

学生ボランティア活動に参加して

文学部 教育学科

4回生 植田 ひろえ

私は2回生から高倉台小学校でスクールサポーターとして活動してきました。2、3回生の頃は授業の関係で半日のみの活動でしたが、4回生になり1日参加できるようになり担任の先生方とのコミュニケーションが増え、最後の1年間の活動は特に得るものが多かったと思います。

私は低学年のクラスに入ることが多く、生活では秋見つけや町探検などの学外活動、学校行事では音楽会や体育会にも参加させていただきました。その中で子どもたちの発言や行動から学んだことがたくさんあります。秋見つけをしている時、ある1年生の児童が「先生！赤くなりかけている葉っぱ見つけた！」と嬉しそうに見せてきました。続けて「この葉っぱは緑色と赤色が混じっているから夏から秋になる間で落ちたんかな？不思議やな〜。」とっていました。この発言を聞いたとき、1年生にはたくさんの知識があるわけではないが初めてに出会ったとき、今までの経験からいろいろなことを自分なりに考え追究しようとしていること、低学年だからこそ芽生える素朴な疑問から子どもたちの持つ豊かな感性に気づくことができました。この日あったことを担任の先生に伝えると、先生からは「低学年の担任として、このような豊かな感性を高学年になっても持ち続けることができるよう日々の言葉かけや児童の発言・行動に対してのリアクションを大切にしている。」という話を聞くことができました。学校生活の基礎を作り上げる低学年、善悪の判断や規範意識の醸成をはかる時期であるがそんな中でも低学年だからこそ持っている感性を大切にすること意識を持つことが重要であると感じました。

1日子どもたちと過ごしていると、指導場面やケンカに鉢合わせることも多々ありました。自分では手に負えないものはすぐに近くの先生を呼んでもらったり、鉢合わせた場面を報告することは必ずしていました。そんな中、私が週に1度活動に行くたびに友達とトラブルを起こしている子がいました。その子に対する周りの対応は日を追うごとに冷たくなっている気がしていましたが、なぜかトラブルになってしまう子へ対して私自身どのような声かけをするべきか迷っていました。そこで担任の先生に相談すると「親御さんが『子どもの好きにさせといてください。』と言っているから、家で難しい部分は学校で根気強く指導していかなければいけない。学校は親を変えることはできないが、子どもが変わることで親の考えを変えるきっかけを作ることができるからそこを目指して指導している。」とおっしゃっていました。4月から学校現場へ行くのとたくさんの子供にも出会うと同時にたくさんのお大人にも出会うと思います。私の言葉や行動で人を変えることはできなくても、微力ではあるが人が変わるきっかけを与え続けることはできるなと強く思いました。いつ花が咲くかわかりませんが子どもたちの成長を願い、根気強く種をまき続けたいなと思います。

3年間のスクールサポーターで学んだことを4月からの教員生活に活かしていきたいです。